



Title	近現代接尾辞「性」「化」「者」の歴史——日中両語間の相互影響——
Author(s)	沙, 広聡
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92015
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (沙 広聡)	
論文題名	近現代接尾辞「性」「化」「者」の歴史 ——日中両語間の相互影響——
論文内容の要旨 本研究の目的は、現代日中両語にともにある接尾辞「性」「化」「者」について、主に近代に作られた新語・訳語に注目し、「性」「化」「者」の接辞化の歴史を解明することである。先行研究で解明されていない課題の解決に重点を置きながら、日本語における接尾辞「性」「化」「者」の歴史全体についての記述を試みた。また、語彙交流という観点から中国語における接尾辞「性」「化」「者」の歴史も視野に入れ、日中両語間の相互影響について考察を行なった。 本論は4章からなり、各章の内容をまとめると、以下の通りである。 第2章は、“接尾辞「性」の歴史”と題し、18世紀以前の日本語（文学作品）における「性」の使用状況と、18世紀以降の蘭学から20世紀初頭までの接尾辞「性」の発生と展開の様相を考察した。また、中国語における「性」の接辞化の過程を確認し、接尾辞「性」をめぐる日中両語の相互影響についても検討した。考察、検討の結果の要点を整理すると、次のようになる。 まず、古代日中両語において「性」は主に、単字で、あるいはほかの漢字と組み合わせあって使用される。その中で、日本語において、「漢字2字＋性」や「和語＋性」といった構造の語が造出され、「性」は独自の発展を遂げた。 18世紀以降、蘭学資料において「性」の接辞化が進み、「性」の造語が蘭方医学から多分野へ広がった。「性」と共起する要素を見てみると、その中には2字漢語が多く、「防腐」「可溶」など、中国語の語順で作られたものも確認された。明治期に入り、接尾辞「性」の用法はさらに発達し普及した。 一方、中国語における「性」は19世紀の洋学資料において接辞化が見られ、「性」を後部要素とする新語が複数現れた。20世紀以降、日本由来の「～性」という形の語が翻訳活動によって中国語に多数取り入れられ、「性」の接辞化は日本語の影響で加速した。1920年代、接尾辞「性」の用法はますます普及が進んだ。 第3章は“接尾辞「化」の歴史”と題し、古代日本語における「化」の使用状況と、18世紀以降の蘭学から20世紀初頭までの接尾辞「化」の発生と展開の様相を考察した。中国語における接尾辞「化」の歴史と、「化」をめぐる日中両語の相互影響についても検討した。結果をまとめると、以下のようである。 古代中国語における「化」は主に、単字で、あるいはほかの漢字と組み合わせあって使用される。変化を表す「化」と変化の結果を表す「結果要素」との結合は、「化＋結果要素」というような動詞句の形で出現するのが一般的である。古代日本語ではそれが継承され、「化」は名詞、サ変動詞語幹として使用されるほか、2字漢語の一部として機能するのが基本的な用法であった。 18世紀以降、蘭学資料において「化」は接辞化が進み、明治期に入ると、その接辞化は一層進んだ。明治期における「化」の接辞化は、明治前期まで蘭学の伝統を受け継いだ自然科学の分野において進行し、後期になると西洋諸言語の翻訳という文脈にも支えられ人文社会科学分野において急速な発展を遂げた。 一方、中国語では、19世紀末以降、日本語の影響を受けて「化」の接辞化が進んだ。1910年代前半まで辞書、新聞紙を通じて「～化」という形の語が中国語に入り続けた。1920年代、2字語を中心とした近代中国語の語彙体系がほぼ築き上げられ、「化」を後部要素とする語の使用がますます盛んになった。「化」の前部要素には日本語の影響を受けたものが多いことから、中国語における接尾辞「化」の成立には日本語が深く関係したことが分かる。 第4章は“接尾辞「者」の歴史”と題し、江戸期までの「者」の接辞化の様相と明治期以降の接尾辞「者」の普及の要因について考察を行なった。中国語における接尾辞「者」の歴史と、「者」をめぐる日中両語の相互影響についても検討した。結果を整理すると、次の通りである。 まず、古代中国語における「者」はほかの要素の後ろに付いて名詞性の句を構成する用法を持つ。「者」は、漢籍の輸入を通じて、中国語から日本語に取り入れられた。漢籍の受容に伴い、「者」を後部要素とする語が大量に成立し、『日葡辞書』（1603～04（慶長8～9）年）では131語が確認される。接尾辞「者」の用法は、17世紀初頭に基本的	

に形成されたと考えられ、明治期に入ると全面的に普及した。

一方、19世紀の中国語において、「者」は西洋言語との接触により接辞化が進んでいた。入華宣教師の著作において、「者」を後部要素とする語の造出と使用が盛んに行なわれ、後世の英中辞書類に大きな影響を与えた。1910年代から1920年代にかけて、接尾辞「者」の使用は増加し普及したが、これもまた2字語の発達に影響を与えた日本語と深く関わるものと考えられる。

第5章は“字音接尾辞成立の要因と仕組み”と題し、上記の第2章から第4章までの考察に基づき、日本語における字音接尾辞の成立の要因と、その成立に至るまでの具体的な流れについて筆者の考えを述べた。また、中国語における接尾辞成立の要因についても検討した。要点を以下に記す。

まず、日本語における字音接尾辞成立の要因について、次の3点が挙げられる。1点目として、日本語はいわゆる多音節語であり、従来1漢字1語というような制約を持たないことである。2点目として、字音接尾辞の発展の土台となる2字漢語を中心とした漢語群の形成が、早期に実現したことである。3点目として、日本人が主導した翻訳活動において、日本語と西洋言語との直接的な接触が実現されたことである。このうち、1点目と2点目は日本語内部にはたらく要因であり、3点目は外部からの刺激によるもので、言語接触による外的要因とすることができる。

また、字音接尾辞の成立に至るまでの具体的な流れについては、次のように集約される。まず、漢字漢文の受容に伴い、字音要素が中国語から日本語に入る。次に、字音要素が含まれる漢字連接が1語化し、2字漢語を中心に漢語語彙が形成されると同時に、字音要素の語構成機能が発達していく。さらに、西洋文化の受容に伴い、新語・訳語が大量に造出されるが、2字漢語が多く含まれる近現代の語彙が整備されるにつれて、字音要素は生産的に語を作り上げていき、最終的には接尾辞として確立し普及する。

一方、中国語における接尾辞成立の要因について、その主要なものとして次の2点がある。1点目は、日本語の影響を受けた2字語を中心とした近現代語彙体系の形成である。2点目は、白話文運動などを中核とした新文化運動による近現代の文体の形成である。このほか、接尾辞の成立において決定的ではないが、西洋言語の影響も重要な要因の1つとして考えられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (沙 広 聡)				
	(職) 氏 名			
論文審査担当者	主 査	大阪大学	教授	田野村忠温
	副 査	大阪大学	教授	石井 正彦
	副 査	大阪大学	教授	三宅 知宏
論文審査の結果の要旨				
以下、本文別紙				

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 近現代接尾辞「性」「化」「者」の歴史——日中両語間の相互影響——

学位申請者 沙広聡

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	田野村忠温
副査	大阪大学教授	石井 正彦
副査	大阪大学教授	三宅 知宏

【論文内容の要旨】

本論文は、日本語と中国語において共通に広く使われている接尾辞のうち、特に生産性が高く、かつ、その成立や普及に日中両語間の相互影響が認められる「性」「化」「者」の3つを対象とし、それぞれの歴史に考察を加えたものである。元来中国語の名詞や動詞であったものが接尾辞としての性質を獲得し、一般化するまでの過程を、各種の資料を用いた用例調査に基づいて論じている。

本論文は6章より成る。目次や参考文献などを含めて150ページ、400字詰め原稿用紙に換算して約500枚の分量である。

「第1章 序論」では、研究の背景として近代の新漢語と日中語彙交流、字音接辞の歴史に関する従来の研究などについて述べたあと、本論文の対象と目的、調査の資料と考察の方向などを示している。

第2章から第4章までの3章がそれぞれ接尾辞「性」「化」「者」の歴史に関する考察である。各章においては、まず先行研究とその問題点、取り組むべき課題を述べたうえで、当該の接尾辞が接辞化する前の中国語における意味用法と日本語におけるその受容、日中各語におけるその後の接辞化の進行、19世紀末以後における日本語から中国語への影響の様相などを論じている。

「第2章 接尾辞『性』の歴史」では、漢籍から「性」を取り入れた日本語においては早くから「性」を後部要素とする複合語が作られていたが、その後江戸期に化学や医学を中心とするオランダ語翻訳の文脈で「性」の接辞化が進み、明治期の洋学、英学の隆盛の中で「性」の接辞的用法がさらに一般化をとげたこと、また、中国語においても「性」の接辞化は日本語の影響を受け始める前の19世紀後半の洋書翻訳の文脈においてすでに始まり、しかし、それが19世紀末以降日本語の影響によって促進されたとする分析が述べられている。

「第3章 接尾辞『化』の歴史」では、「化」も「性」と同様に日本語に取り入れられた後に複合語の後部要素として使われるようになり、それが江戸期の蘭学、明治期の洋学において生産性の高い接辞として使われるようになったこと、しかしそれとは対照的に、中国語には元来「化」を後部要素とする複合語はあまりなく——日本語における「～化」という形の複合語の形成は「～に化す」という動詞後置型の日本語の語順を基礎としている——、中国語における「化」の接辞としての使用は19世紀末以降の日本語の流入によって初めて普及、定着したことが述べられている。

「第4章 接尾辞『者』の歴史」では、「者」について「性」に似た歴史的な展開が述べられている。ただし、「性」の場合とは異なり、明治期における「者」を後部要素とする複合語には中国の英華辞典からの借用によるものが多いとする。

「第5章 字音接尾辞成立の要因」では、日本語において「性」「化」「者」などの接辞化が起きた要因を探り、音韻的な要因、語彙的な要因、西洋の言語との接触という外的な要因を論じている。

「第6章 結論」は論文全体の総括と今後の課題の提示である。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、当該の問題に関する従来の研究の成果を踏まえつつ、より広い見地から膨大な用例調査に基づいて抜本的に再考し、「性」「化」「者」の接辞化の歴史に関する理解を深めようとしたものであり、その目的は十二分に達成されたと評価することができる。

本論文が考察上の方針とした特徴的な点が2つあり、第1は、3字漢語以外の複合語にも注意を払っていることである。従来の研究では全般に3字漢語が考察の中心とされ、2字漢語に関してはわずかな考察にとどまるか、そもそも扱われない場合も多かった。しかし、本来独立していた1字漢語がいかにして独立性を失ってもつばら別の要素に付加して使われる接辞に変わったかという問題を考えようとするれば、接辞化以前の時期に作られた2字漢語の存在を無視することはできない。本論文では、そのような考えから、3字漢語と2字漢語、さらには和語や外来語を前部要素とする複合語をも観察の対象として考察を行っている。

第2の方針は、従来の研究と異なり広い範囲の時代、種類の資料に基づいて用例を収集し、考察を行っていることである。時代について言えば、日中両語間の相互影響は19世紀末から20世紀初期にかけての時期に顕著に認められる現象であるが、その時期に着目するだけでは接辞化の歴史を明らかにすることができない。著者の考察によれば、接辞化に至る過程は古代に始まっており、また、接辞によっては日本語において発生した接辞化と同様の現象が日本語の影響を受け始める前の中国語においても同様に観察される——すなわち、中国語での接辞化は必ずしももつばら日本語の影響によって生じたわけではなく、中国語ですでに始まっていた接辞化が日本語の影響によって促進されたという面もある——からである。また、用例収集のための資料について言えば、特定の種類のものに狭く限定せず、日本語については古辞書、古典文学作品、キリシタン資料、蘭学資料、近代啓蒙書、初期の英和辞典、幕末以後の新聞・雑誌、中国語については四庫全書に収められた漢籍全般、19世紀以後の洋学資料、漢訳日本書、新聞・雑誌などの多様な資料から用例を博搜している。

本論文は日中両語における接尾辞「性」「化」「者」の成立の過程を綿密に跡付け、研究史に実質的な貢献を成し得るものに仕上がっている。ただし、論文の価値をさらに高めるために考えるべき点や読者がさらに詳しく知りたいと感じる点も少なくはなく、接辞の概念理解、翻訳に使われた接辞と原語との対応、3つの接尾辞の差異、接尾辞の種々の文法特性などについてさらに詳しい議論があればいっそうよかったであろう。また、第5章で考察されている字音接尾辞成立の要因は重要な問題であり、本格的に論じるにはさらに詳細な議論が求められる。もっとも、それらは本論文の先にあるべきさらなる発展に向けた課題であり、著者が本論文を出発点としてこの問題に関わる研究をさらに拡大、発展させることを期待したい。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。